課　　題

音楽科における「考える力」を育てる学習指導の在り方

～表現と鑑賞の関連を図った授業の構築を通して～

日立市立豊浦中学校
花田　喜龍

【　目　次　】

○　研究の主張点 ---------- 3

1　主題設定の理由 ---------- 4

2　研究のねらい ---------- 4

3　研究の仮説 ---------- 4

4　研究の内容
(1) 基本的な考え方 ---------- 5

(2) 研究の実践
①　中学校第１学年における「対照の音楽を創ろう」(鑑賞および創作)
---------- 6

②　中学校第２学年における「長唄（歌舞伎）を親しもう」(鑑賞及び歌唱)
---------- 10

5　研究の成果と課題 ---------- 11

○　研究の主張点

１　はじめに

平成20年に公示された学習指導要領の基本的な考え方は，「『確かな学力』がセットされた『生きる力』の育成」である。「確かな学力」とは，「関心・意欲・態度」の上に立つ「思考力・判断力・表現力」が，「知識・理解」や「技能」に結晶化されていくものであるといわれる。

「音楽科における確かな学力」も，知識や理解，技能を習得することであるといえる。それは，音楽活動に対する関心・意欲・態度を基盤としている。表現活動において「表現の工夫」を考えたり，鑑賞活動において「音楽を形づくっている要素」を知覚し，そこからよさや味わいなどを感じ取ったりした時に，音楽に関する用語や言葉等を用いて表現する力（＝音楽科における『考える力』）が育む。この『考える力』の育みこそが，「音楽科における確かな学力」の育成である。

本研究は，平成18・19年度に茨城県教育研修センターにおいて研究された「音楽科における『考える力』を育てる学習指導の在り方」を基盤としている。本研究では「表現」と「鑑賞」の２領域の関連を図った授業を構築することで，さらに音楽的な思考を深めていくものと考え，本主題を設定した。

２　研究の概要

本研究では２つの実践を通し，**仮説⑴鑑賞と表現との関連を図った授業を構築することによって，音楽科における「考える力」を育み，一人一人の思考力・判断力・表現力がより高まるであろう。仮説⑵ 活動の目的に適した教材を用いることによって，より学習内容が深化し，「考える力」を育むこととなるであろう。**を検証していく。

実践①　中学校第１学年における「対照の音楽を創ろう」（鑑賞および創作）

「Ａ－Ｂ－Ａ」の形式をもつ旋律創作を行う。鑑賞活動による学びの成果（①「Ａ－Ｂ－Ａ」の形式を理解する，②相対する要素（「音の長さ」「強弱」「速度」など）の違いが生み出す表現効果を感じ取る，③表現方法として「クレシェンド」「低音から高音への移行」「音色の変化」などの要素を感じ取る）を，自分たちの創作に生かすことを目的としている。（平成２０年度　県北ブロック音楽教育研究会公開授業）

実践②　中学校第２学年における「長唄（歌舞伎）を親しもう」（鑑賞及び歌唱）

我が国の伝統的な発声を実際に行うことでその特徴を感じ取る。そこで感じとった楽曲の良さや特徴を生かしながら，さらにより豊かに楽曲を鑑賞することを目的としている。（平成２１年度　茨城大学教育学部附属中学校研究発表会にて実践報告）

３　研究の成果と課題

多くの生徒が感じ取ったことを言葉で表そうと思考・判断をする活動は，それらを生かし，深化させた学習活動に発展させていくことに有効であり，「考える力」を育てることになるといえる。

今後は，諸要素の働きを感じ取ることや楽譜を読むことが苦手とする生徒に対し，少ない時間での個別支援の在り方について，さらに追求していきたい。

研究主題	音楽科における「考える力」を育てる学習指導の在り方 ～表現と鑑賞の関連を図った授業の構築を通して～

1　主題設定の理由

平成20年3月28日，文部科学省は新しい学習指導要領を公示した。梶田氏は，今回の学習指導要領改訂におけるキャッチフレーズを**「『確かな学力』がセットされた『生きる力』の育成である」**と述べている。また，「確かな学力」とは，**「それ自体も複眼的な考え方で，「関心・意欲・態度」の上に立つ「思考力・判断力・表現力」が「知識・理解」や「技能」に結晶化されていくものである」**と述べている[*1]。

音楽科における「思考力・判断力・表現力」の育みについて大熊氏は，**「『知覚し感じ取ったことを基に』は，表現領域の指導と鑑賞領域の指導の両方に共通している。『自分なりの思いや意図をもって表現を工夫』する，『自分なりの意味を見いだし，解釈しながら聴き取』ることが，『知覚し感じ取ったこと』に支えられつつ，生徒の思考力・判断力を育てていく。その上で『歌を歌う，楽器を演奏する，音楽を創作するための技能を高めて，音楽で表す』，『よさや味わいなどについて，音楽に関する言葉などを用いて発言したり文章に書いて表す』ことで生徒の表現力を高めていく」**と述べている[*2]。また，伊野氏は，**「音楽的な思考は，音楽と対峙することで深まっていく。音楽的な感受を支えとし，自己の感性や身体と語り合い，常に音や音楽と向き合いながら，考えを深め，表現や鑑賞をしていく創造的な活動である。」「思考の過程や結果は，言語活動と結び付くことにより深まりを増していく。（中略）しかしその際，言葉となる以前の体験が，音楽受容の原点であることも忘れてはならない。」**と述べている[*3]。

『音楽科における確かな学力』も，知識や理解，技能を習得することであるといえる。それは，音楽活動に対する関心・意欲・態度を基盤としている。表現活動において「表現の工夫」を考えたり，鑑賞活動において「音楽を形づくっている要素」を知覚し，そこからよさや味わいなどを感じ取ったりした時に，音楽に関する用語や言葉等を用いて表現する力（＝音楽科における『考える力』）が育む。この『考える力』の育みこそが，「音楽科における確かな学力」の育成である。

そこで「確かな学力」を身に付けるためには，表現と鑑賞の関連を図った授業の構築を通して音楽科における「考える力」を育てることが重要と考え，本主題を設定した。

2　研究のねらい

表現と鑑賞の関連を図った授業を構築することで，音楽科における「考える力」を育てる学習指導の在り方を究明する。

3　研究の仮説

(1) 鑑賞と表現との関連を図った授業を構築することによって，音楽科における「考える力」を育み，一人一人の思考力・判断力・表現力がより高まるであろう。具体的な手立てとして「鑑賞で知覚したことを表現に生かす」「楽曲のもつよさや味わいを他と共有する」などがあげられる。

(2) 活動の目的に適した教材を用いることによって，より学習内容が深化し，「考える力」を育むこととなるであろう。

4　研究の内容

(1) 基本的な考え方

①　「考える力」を育てるにあたっての配慮点

○　生徒が主体的かつ創造的に音楽にかかわり，自らの思いや意図をもちながら，自分なりの表現の仕方を工夫したり，音楽を聴いて積極的にそのよさや美しさを味わうことができるような学習活動の展開を工夫する。

・　研究を実践するにあたり，まず「互いの意見を尊重しながら自分の意見を主張する場」の設定を重要視した。先行研究によると，『他を尊重しながら自己を高めていく最も適切な人数は５人前後』とのデータがある（1990竹下，1996花田）ことから，４～５名の小グループ集団を核とした活動を学習の基本とした。また，自らの思いや意図を表現する手だてとして，個別指導やグループ指導において表現の技能を高めるための教え合いや援助・指導を多くの場で取り入れていく。

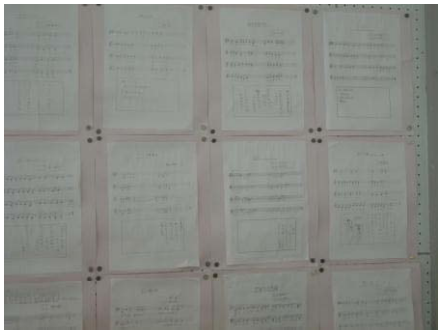
・　「グルーピング」「選曲」「練習計画」など，自分たちで考え，決定する場を多く設定した。学習活動の中における自己判断・自己決定そのものが「自己を表現する力」である。グループとしてのより良い判断・決定を下すには，構成メンバー一人一人の自己表現力の他に，「より高い次元の演奏をしていこう」という向上心を基盤とした「学び合い」「高め合い」の精神が必要となる。また，「自分で決めた」ことによる学習意欲の喚起をも期待できる。

○　生徒の意欲を一層高めるとともに，音楽を形づくっている要素等を知覚し，そのよさや味わいを深く感じ取れるような，魅力ある教材を選択する。

・　より良い音楽に練り上げていくためには，生徒一人一人が「何を」「どのように」すればよいかを，明確に捉えなければならない。この「何を」が「音楽を形づくっている要素」であり，要素の違いによる曲想の変化を感受し，それを自分の言葉で相手に伝え合うことが，グループでの表現を深める活動であるといえる。

　そのためには，まず，要素の働きをしっかりと知覚させることが必要であり，それを自己の経験を基に組織化し，言語として表現するプロセスを重視しなければならない。

音楽室の掲示「音楽を形づくっている要素」


音楽室の掲示「先輩の創作作品」

・　教材の選択にあたっては，「要素の働き」が明確に知覚できるように心がける。特に鑑賞教材は「楽曲全体の雰囲気を味わって聴く」ことと「要素の変化による表現効果が際立つ部分を聴く（いわゆる部分鑑賞）」こととが効果的に表現活動に生かされる教材の選択が重要である。

○　自分なりに解釈をしたり評価したりしたことを，用語や言葉などを適切に用いて表現できるような指導を工夫する。

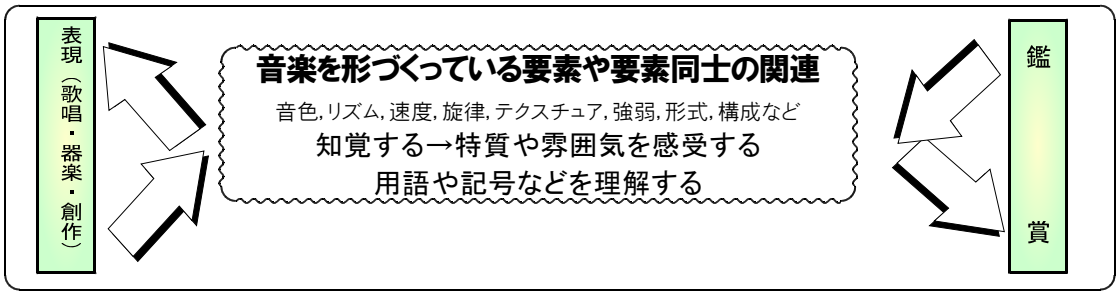
・　用語や言葉を理解し，使うことができるようになるために，授業の開始時２～３分を「スキルアップの時間」として設定する。具体的には，「楽語の知識」や「拍子感」，「終止感」などを，音や音楽を通して習得する時間とする。

・　ワークシートの工夫を行う。「スモールステップアップ」に心がけたＡ５サイズのワークシートを毎時積み重ねていくことで，前時の活動と比較をし，活動の変遷が分かるようにする。

②　表現と鑑賞の関連について

表現（歌唱，器楽，創作）と鑑賞を関連づけるためには，そのいくつかを必然的に関連づけなければならない。その際，つなぎ役となるのが学習指導要領における〔共通事項〕である。

〔共通事項〕の学習は，音楽がどのように形づくられているかについて，要素や要素同士の関連を知覚すること，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受すること，音楽を形づくっている要素をそれらの働きを表す用語や記号などについて音楽活動を通して理解すること，これらが一連のものとしておこなわれることが大切である[*4]。



(2)　研究の実践

①　中学校第１学年における「対照の音楽を創ろう」（鑑賞および創作）

本題材では，鑑賞活動において感受した作曲上の工夫点を，自らの創作活動に生かしていくことを目的としている。

まず，旋律を創作する前に，「夏」「白」「朝（夜明け）」「外国」の中からテーマを一つ選択する。次に，テーマに対するイメージをできるだけたくさんの言葉で書く（例えば「朝」なら「まぶしい」「日の出」「さわやか」など）活動を取り入れた。さらに，その言葉を音楽を形づくる要素の働きと結び付けて旋律を創作させる（例えば「まぶしい」なら「音の長さを短く」，「日の出」なら「だんだん強く」など）。これらの活動によって，生徒たちの抽象的なイメージは具体的なものになり，音楽を形づくっている要素に強く着目するきっかけとなった。

また，あらかじめ設定したリズムパターン（２拍子・３拍子・４拍子の３パターンを準備）や共通のテーマをもとに旋律を創ることで，旋律創作の基礎を学びながら，無理なく楽しんでできる活動にした。さらに，個人で創作活動をしていく過程で，お互いに聞きあったり，学級全体やグループ内で検討する場を設けた。このことは，お互いの作品のよさを認め合い，そこから学びあうことになった。

学習と評価の計画(6時間扱い)および教材について

次	時	ねらい	主な学習活動	評価の観点			
				関	感	技	鑑
第一次	1	○　テーマを決めて，そのイメージにあった旋律を創作する。	○　教師が提示したテーマの中から，最も表現したいものを１つ選び，そのイメージや曲想を音楽に関する用語や言葉を用いて表現する。	◎			
	2		○　リズムパターンに音高をつけ，A-A’の８小節の旋律を創作する。	○		◎	
	3		○　創作経過を発表し合い，創作の発想を広げ，作品の練り上げを行う。		◎		○
第二次	4	○　「対照の音楽」を創作する。	○　第一次で創作した(A-A’)の対照となるB-B’の８小節の旋律を創作する。	○		◎	
	5		○　A(A-A’)-B(B-B’)-A(A-A’)の形式について知り，創作経過を発表し合い，創作の発想を広げ，作品の練り上げを行う。		◎		○
	6		○　お互いの作品を発表しあうとともに，自己評価をし，学習のまとめとする。	◎			

教材①　バレエ音楽「ダフニスとクロエ」第２組曲より「夜明け」(ラヴェル　作曲)

あらかじめ設定したテーマ「朝（夜明け)」に関する参考作品として鑑賞する。「夜明け」の表現方法として「クレシェンド」「低音から高音への移行」「音色の変化」などの要素を感じ取り，様々な夜明けの表現方法を知るようにした。

教材②　管弦楽組曲第１番ハ長調　BWV．1066より「ブーレ」(バッハ　作曲)

ハ長調で快活な《ブーレ１》と対照的なハ短調の《ブーレ２》からできている。Ａ－Ｂ－Ａの形式を理解するとともに，相対する要素（「音の長さ」「強弱」「速度」など）の違いが生み出す表現効果を感じ取り，自分たちの創作に生かせるようにした。

第３時の学習指導案（展開）

学 習 活 動・内 容	教師の働きかけ（◆学習活動における具体の評価規準)
1　本時の学習課題を確認する。 **創作経過を発表し合い，表現の練り上げを行おう。**	○本時の学習課題を常に意識できるように板書するとともに，学習カードにもきちんと記入する。 ○学び合いの場であることを意識させ，自分の作品の練り上げるための意欲付けになるようにしたい。
2　「ダフニスとクロエ」を鑑賞し，作曲の技法について考える。 (1) 曲全体を味わって聴き，作曲家がどのような場面をイメージして作曲したのかを考える。 (2) 音高と強弱の効果について考える。	○あらかじめ設定したテーマ「朝（夜明け)」に関する参考作品であると同時に，リズムパターン（♩♩♪♪）でできている作品であることを伝えておく。 ○最初は曲全体を味わって聴き，音楽を形づくる要素についての感想をもった生徒の発言を取り上げて，構成の秩序や速度，強弱の変化に気付くようにする。 ○拡大総譜を用意し，自分たちが創った曲との記譜上の

	違いを考えることで，さらに要素の変化に気付かせたい。 ◆構成の秩序（反復，高揚）や速度，強弱の働きによって生み出される楽曲の雰囲気や曲想を意識する。 （エ－①）
3　代表者の創作経過についての発表を聴く。 ・　曲のテーマとそのイメージが，創った旋律にどのように生かされているかを話し合う。	○テーマからどのようなイメージで音楽づくりを行ったかを発表し，聴くポイントとしたい。
4　発表された代表者の創作作品をよりイメージに近いものにするために，各グループで検討を行う。	○グループは生徒同士のかかわり合いの場として設定し自由な話し合いができる雰囲気を作っていきたい。また，生徒同士の意見交換を通して，多面的な視点から創意工夫を深められるように支援する。
(1) 創作経過を踏まえ，よりよい作品になるために，さらにイメージを具現化させる手立てを考える。 (2) 話し合いの結果をもとに，それぞれの作品に対するアドバイスを行う。	○あらかじめ，高揚や速度，強弱，音高などの要素を提示しておき，作品に対するアドバイスと要素との関連が分かるようにしたい。
(3) これまでの活動をもとに自分の作品を見直して，どのように工夫すると良いかを考える。	○自分の作品の工夫する点についてワークシートに記入することで学びの成果が分かるようにする。 ◆構成の秩序（反復や終止感，高揚）や速度，強弱とイメージをかかわらせて創作表現を工夫したり，要素が生み出す楽曲の雰囲気や曲想の変化を感じ取ったりする。（イ－①）
5　本時のまとめを行う。	○次時からは本時で学んだことをより発展させ，異なる雰囲気をもった「対照の音楽」を創作することを告げる。

本時における観点別評価の生かし方

【鑑賞の能力】	
評価規準	評価方法・Ｃと判断される状況への働きかけ・Ａと判断するキーワード
エ－① 構成の秩序（反復，高揚）や速度，強弱の働きによって生み出される楽曲の雰囲気や曲想を意識する。	【評価方法】 ・挙手や発言の内容，表情などを観察し，学習カードへの記入からとらえる。 【Ｃと判断される状況への働きかけ】 ・拡大楽譜中の記号などをヒントとして与え，注目するように助言する。 【Ａと判断するキーワード】 □反復の中の変化　□曲の盛りあがり　□自分の視点による記述

【音楽的な感受や表現の工夫】	
評価規準	評価方法・Ｃと判断される状況への働きかけ・Ａと判断するキーワード
イ－① 構成の秩序（反復や終止感，高揚）や速度，強弱とイメージをかかわらせて創作表現を工夫したり，要素が生み出す楽曲の雰囲気や曲想の変化を感じ取ったりする。	【評価方法】 ・グループによる創作作品の検討を通して，工夫している点を観察する。また，自分の作品を見直して工夫する点について，ワークシートへの記述からとらえる。 【Ｃと判断される状況への働きかけ】 ・鑑賞でおさえたポイントを確認するとともに，グループの話し合いに積極的にかかわっていくよう，助言する。 【Ａと判断するキーワード】 □反復の中の変化　□終止感　□イメージにあった表現

◎　授業の記録

○　評価「Ａ」の生徒の観察から

・　数多くある音楽の諸要素の中から，教師がポイントを絞って提示したので，方向性をつかみ，作品を創っていた。

・　強弱の工夫では，どのようにすれば自分で表現したいテーマに近づけるか，よく理解できていた。

・　楽譜上では表せるが，それをすぐに音にして表現できないもどかしさが感じられた。

○　評価「Ｃ」の生徒の観察から

・　感じたものはあるが，それをどのようにして楽譜に記せばよいのか分からない生徒が見られた。

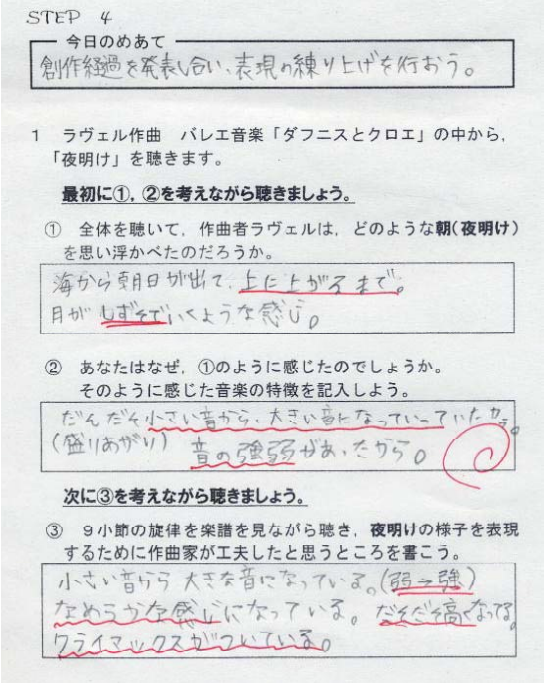
・　自由に創作する中で，音楽の諸要素の働きをあまり理解できていないため，どのように表現すればよいか分からないでいた。

○　参観者の先生から

・　強弱やスラー（音長）の変化はつけやすいが，音の高さを変えるのは難しい。

・　何もかもを自由にやらせてしまうと完成できなくなるのではないか。

・　リズムパターンを提示したことで，動機を発展させた授業展開をすることもできる。鑑賞した活動が生かされていた。


STEP 4

今日のめあて

創作経過を発表し合い、表現の練り上げを行おう。

1　ラヴェル作曲　バレエ音楽「ダフニスとクロエ」の中から，「夜明け」を聴きます。

最初に①，②を考えながら聴きましょう。

①　全体を聴いて，作曲者ラヴェルは，どのような朝（夜明け）を思い浮かべたのだろうか。

海から朝日が出て、上に上がるまで。
月がしずまでいくような感じ。

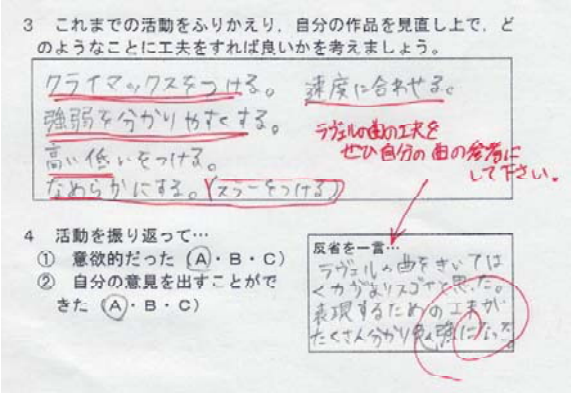
②　あなたはなぜ，①のように感じたのでしょうか。
そのように感じた音楽の特徴を記入しよう。

だんだん小さい音から、大きい音になっていっていたから。
（盛りあがり）　音の強弱があったから。

次に③を考えながら聴きましょう。

③　９小節の旋律を楽譜を見ながら聴き，夜明けの様子を表現するために作曲家が工夫したと思うところを書こう。

小さい音から大きな音になっている。（弱→強）
なめらかな感じになっている。だんだん高くなる。
クライマックスがついている。

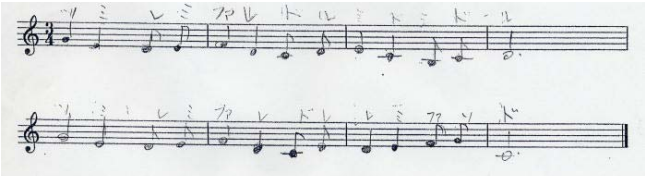

3　これまでの活動をふりかえり，自分の作品を見直し上で，どのようなことに工夫をすれば良いかを考えましょう。

クライマックスをつける。　速度に合わせる。
強弱を分かりやすくする。
高い低いをつける。
なめらかにする。（スラーをつける）

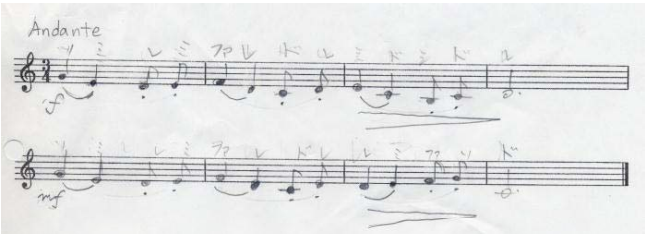
ラヴェルの曲の工夫をぜひ自分の曲の参考にして下さい。

4　活動を振り返って…
①　意欲的だった（A・B・C）
②　自分の意見を出すことができた（A・B・C）

反省を一言…
ラヴェルの曲をきいてはくカがありすごいと思った。表現するための工夫がたくさん分かり勉強になった。



↓



〔ワークシート〕と〔作品の変化〕

② 中学校第２学年における「長唄（歌舞伎）を親しもう」（鑑賞及び歌唱）

本題材では，表現活動（歌唱）を通して捉えた楽曲の良さや特徴を生かしながら，より豊かに楽曲を鑑賞することを目的としている。

歌舞伎は我が国を代表する舞台芸術であるにもかかわらず，中学生にとって親しみがあるものとは言い難い。そこで実際に歌舞伎音楽である長唄を唄う活動を通し，西洋音楽との発声法の違いを比較することで，長唄の「発声の仕方」「声の音色」「こぶし」「産字（うみじ）」「語呂」などの特徴を感じ取らせ，独特の表情や味わい，文化的背景などを実感できるようにした。また，長唄をうたう活動によって，歌舞伎そのものにも強い関心をもち，その良さを理解できるようにした。

学習と評価の計画（3時間扱い）および教材について

次	時	ねらい	主な学習活動	評価の観点			
				関	感	技	鑑
第一次	1	○　長唄（歌舞伎）の特徴を感じ取り，その良さを楽しむ。	○　歌舞伎の成立背景や役者，舞台の仕組みなどについて知り，興味をもって鑑賞する。	◎			
	2		○　長唄をうたい，その特徴を感じ取る。	○	◎		
	3		○　歌舞伎を鑑賞し，その良さを理解し楽しむ。		○		◎

教材①　歌舞伎「勧進帳」および長唄

「勧進帳」（四世杵屋六三郎　作曲）

歌舞伎十八番の一つで，如意の渡しでの出来事を基軸にした能の演目『安宅』をもとにした歌舞伎の演目。分かりやすいストーリーと力強い長唄で構成されている。

本題材では，この中の長唄「面白や山水に」を取り上げる。技術的には難しくないが，音の高低，長短，こぶしなど，変化に富んだ唄である。

教材②　NHKテレビ「いろはに邦楽」（DVD）より

「長唄を唄う」「長唄の名曲」[*5]

我が国の伝統的な和楽器やジャンルをとりあげ，その種類や演奏法などを山田邦子の案内でわかりやすく，身近な内容で構成する紹介する番組。芳村伊十衛（唄），今藤長十郎（三味線）による長唄の唄い方の説明は中学生に適している。

◎　授業の記録

○　ワークシートの記述から

《第２時　長唄を唄おう：長唄の特徴を聴き取ろう》

発声の仕方	・一つ一つの言葉がはっきりと，伸びていてよかった。 ・一つ一つの音を丁寧に出している。 ・腹の底から出す感じ。力強い。 ・あまり口を開かない。身体をあまり動かさない。 ・響くような声ではなく，通るような声。
声の音色	・声が太い。 ・ゆっくりと流れるような感じがする。 ・高い声と低い声の響かせ方が違う。使い分けている。 ・あまり安定していない。
こぶ	・伸ばす所の「～～」がいい。 ・声を響かせて強調している所がある。

し・節回し	・ヴィブラートのようなものがゆったりとかかっている。 ・今と比べると絶対にないような音程のような気がする。 ・演歌のように最後の音がふるえている。 ・音が少し波打つ感じ。 ・声が響いて聞こえる。
産字	・母音が独立されてのばしている。 ・産字によってその歌の意味がよく表されていた。
語呂	・行ったり来たりするイメージ。最後の音が上に上がる感じ。 ・起伏が激しい。

○　抽出生徒（３名）の感想（第１時から第３時までの移り変わり）

《第１時　歌舞伎を知ろう》

Ａ子　声がとても大きい。昔の言葉なのでよく分からないところが多い。

Ｂ男　話すスピードが遅い。
　言葉と言葉の間に「いよぉー」とか太鼓とかの音が入る。

Ｃ美　声の強弱がきちんとついていて，感じが伝わってくる。

《第２時　長唄を唄おう》

Ａ子　リズムがとれない。テンポが一定でない。

Ｂ男　いきなり音があがるのが難しい。音程がしっかりしていないので取りにくい。

Ｃ美　変わっているからおもしろい。上手くなれば楽しいと思う。

《第３時　歌舞伎を味わおう》

Ａ子　声の表情で怒りなどを表しているのが分かった。

Ｂ男　盛り上がる場面などに音楽が効果的に使われていた。

Ｃ美　話し方で，音の高さや速さなど，その場その場の感情が伝わるところが歌舞伎の特徴だと思う。

５　研究の成果と課題

(1) 成果

実践①「対照の音楽を創ろう」では，多くの生徒が鑑賞活動において感じ取ったことを自分の言葉でワークシートにまとめることができた。また，原曲のオーケストラスコア（総譜）やパート譜を用意しておいたことで，「どのように楽譜に表せば自分たちのイメージに近い音になるのか」を考えるきっかけとなった。

参観者の先生の意見にもあるように，扱う要素を「強弱」「音長」「音高」などに限定したことで創意工夫のポイントが絞られ，旋律での表現を「言葉で表現したイメージ」に少しでも近づけようと試行錯誤する生徒が多く見られた。

実践②「長唄（歌舞伎）を親しもう」では，長唄の特徴を聴き取る学習で，「ヴィブラート」や「演歌」など，自分が知っている言葉や自分なりに作った記号等を用いて，長唄の特徴を表現しようとする生徒が多く見られた。

抽出した生徒の感想は，第１時に比べて第３時の聴取がより深いことが分かる。特に第

３時では「声の表情」や「音（声）の高さ」「音（声）の速さ」などの変化は，ストーリーと密接にかかわっていることに気付く生徒も多く見られた。長唄を歌った感想として，ほとんどの生徒が「難しい」と感じていたものの，その体験が以降の鑑賞活動をより深化させたといえるだろう。

以上のことから，活動の目的に適した教材を用いた表現と鑑賞の関連を図った学習において，感じ取ったことを言葉で表そうと自分なりに思考・判断をする活動は，深化させた学習活動に発展させていくことに有効であり，「考える力」を育てることになるといえる。

(2) 課題

- 諸要素の働きを感じ取ることや楽譜を読むことが苦手とする生徒に対し，少ない時間での個別支援の在り方について，さらに追求していきたい。
- 感じとったことを生かす手立てが，さらに他教材に広がりをみせたり，生涯にわたって生かすことができたりするようにしたい。
- 長唄をうたう活動において，我が国の伝統的な歌唱表現の技能を高める指導法，およびその評価について，さらに深めていきたい。

---

*1　梶田叡一　2008(平成20)年4月1日　中等教育資料　株式会社ぎょうせい

*2　大熊信彦　2006(平成18)年6月1日　中等教育資料　株式会社ぎょうせい

*3　伊野義博　2010(平成22)年8月1日　中等教育資料　株式会社ぎょうせい

*4　文部科学省　中学校学習指導要領解説　2008(平成20)年9月25日　㈱教育芸術社

*5　NHKいろはに邦楽～長唄と義太夫・お囃子楽器・雅楽　2007(平成19)年12月19日　コロムビアミュージックエンタテインメント㈱（COBG-4700）